

森は海の恋人（7 黒潮）

日本沿岸の海が多様な生き物のいる豊饒の海になるメカニズムについてごく簡単にもう少し見てみましょう。

日本列島の南側(太平洋側)には黒潮、北側(日本海側)には対馬海流が流れています。対馬海流は九州の南沖で黒潮本流から分岐して日本海側に流れています。どちらも暖流です。日本列島を包み込むように暖流が流れるようになったことが結果的に日本沿岸を豊饒の海にしているのです。それには日本列島の森が大きな働きをしています。

日本を囲む海に暖かい海水が流れている為、日本海上の大気は海から蒸発した水分を大量に含み北西の風に乗って日本列島の山々にあたって上昇し日本海側に大量の雪を降らせる。太平洋上の大気は海から蒸発した水分を大量に含み南東の風に乗って日本列島の山々にあたって上昇し太平洋側に大量の雨を降らせる。

日本列島に降った雪や雨がゆっくり地中を通して海に栄養分をもたらせることについてはこれまでに書いてきた通りです。日本海側の寒気はもちろん冷たいのですが、海水が暖かいことが多雨に繋がり、また照葉樹林がかなり北にまで広がる要因にもなっているようです。照葉樹林が北に広がることによって日本列島の森は多種多様な樹木で構成され多種多様な養分が海に帰されていると言う訳です。

この先は本当にざっくりしたお話ですが、黒潮が分流して日本海に流れるようになったのはおよそ 13,000 年前。その影響で日本海側は暖かくなり森に照葉樹林が増え、栗やドングリなどそのままでも食べられる木の実が豊富になった。それが縄文人が日本列島に定住し始めた要因とも考えられています。暖流が豊かな森を育み、森の樹木が定住するための住居の建材になり、また木の实などの食材を育てた。ちなみに縄文人は 20 年ごとに住居を建て替えたそうですが、住居を立てるために伐採した樹木が再生するのに 20 年かかったそうです。循環の中で生きていたということですね。

縄文時代の集落として現在最も有名なのが青森の三内丸山遺跡ですが、300~500 人ほどの大集落を形成、落葉広葉樹を伐採して栗を植林して食料の確保をしていたそうです。また日本海側の各地から翡翠や黒曜石が運ばれ栗などの食料を持ち帰るという交易も行われていたようです。この交易の為に航海は対馬海流ハイウェイに乗っかってきたのかも知れません。帰りはごく岸沿いを行けば海流の影響を受けずに帰れたはずで、その航海に使われた船は丸木舟だと考えられています。今のシーカヤックのルーツです。

今回は「海遍路」です。

推薦図書：人類は何を失いつつあるのか 山極寿一・関野吉晴 対論

TENSIO 井上好司